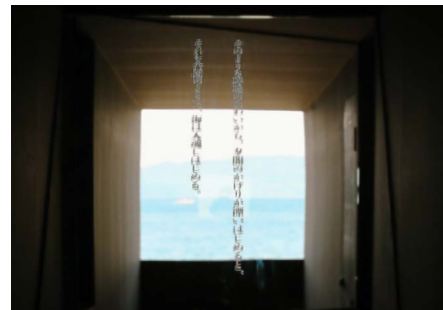




《入魂の宿》の外観などに植えられたハーブなどは住民と美術館が育てたものも使用



ユージン・スミスさんの作品を展示しているベッドルーム



石牟礼さんが描いた海と空が生み出す美しい瞬間を体感できる「NYUKON CELL」

**旧赤崎小学校に
宿泊施設を備えた野外作品**

大型野外作品《入魂の宿》が5月21日(土)から旧赤崎小学校で公開されました。2021年に開館20年を迎えた、つなぎ美術館の「柳幸典つなぎプロジェクト」の一環。アートを手がけたのは、社会問題に独自の視点で切り込む作品で知られる柳幸典さん。事前調査で町を訪れたときに、水俣病や地域の自然を描いた作家の石牟礼道子さんや写真家のユージン・スミスさんの作品を展示する施設がこの地になく、衝撃を受け、石牟礼さんの文学にちなんだ大型展示を企画。石牟礼さんの詩などを基に《入魂の宿》と役場近くの森で《石霊の森》を手がけました。

作品名は石牟礼さんの詩「入魂」から引用。不知火海に見立てた同校のプール跡に住民の協力を得て植物を植え、メダカなどたくさんの生き物が生息するビオトープに改修しました。中央に設けたスロープを降りると、水面と同じ目線になり、生き物や植物との「一体感」を体験できます。かつて水俣病の被害が広がった不知火海を眺めながら、考えを深める場にしてもらうことを意図しました。



5/21(土)に開かれたアーティストトークで《入魂の宿》の概要を説明する柳さん(写真左)

鏡の反射を利用して海と空を鑑賞するスペース「NYUKON CELL」や、石牟礼さんなどの本を室内に備えた瞑想室、スミスさんの写真を飾ったベッドルームもあります。

同日に開かれたアーティストトークで柳さんは「近代化が生んだ水俣病の問題は今こそ考えるべき。答えは出なくとも議論し続けることが大切だということを訪れて感じてほしい」と語りました。

本作品は6月19日(日)まで無料で公開されます。7月からは有料。秋からは宿泊施設としても運営予定です。最新情報はつなぎ美術館ホームページを確認してください。



Artist Talk

海と天が結び合う瞬間を描いた美しい詩の世界を、 地域資源の再生によって造形したかった――

事前調査で津奈木町を訪れたときに、水俣病の存在を世界に広めた文筆家、石牟礼道子さんと水俣を撮り続けた写真家、ユージン・スミスさんの作品を展示する施設がないことに驚きました。住民の間には過去に触れてほしくないという声もあります。しかし、歴史から目をそらさず、正面から水俣病に向き合うことも必要だと思いました。

《入魂の宿》は海に面した廃校となった赤崎小学校のプールを活用した宿泊施設。町

の未来を担う子どもを育み役目を終えたプールを再活用することで、小さな動植物たちの箱庭的生育空間を育てると同時に自然環境の壊れやすさを体感してもらうための装置となっています。《入魂の宿》の名称は石牟礼さんの詩「入魂」から引用。夕暮れから夜へ向かう不知火海を「海は入魂する」と表現するところの、海と天が結び合う瞬間を描いた詩の世界を、地域資源の再生によって造形でできればと願っています。



現代美術家
柳 幸典さん

《入魂の宿》
柳幸典つなぎプロジェクト

海に魂が入る――

【写真】《入魂の宿》「NYUKON CELL」